

## ベビーブーマー世代の親子関係（Ⅱ）

## —親子関係の主観的評価—

千葉大教育 宮本みち子

日大習志野高校

飯塚和子

〔目的〕ベビーブーマー世代が、彼らの老親との親子関係をどのように評価しているかを明らかにし、その規定要因を当事者の生活構造の側面から探る。さらに従来から親子の情緒関係の規定要因とされている居住関係に加え、対象者の家族位座や発達経歴にも視点をあて、ライフコース的手法によって、ベビーブーマー世代の親子関係の実態と意識を明らかにする。

〔方法〕研究の方法は（Ⅰ）と同じ。（Ⅱ）における具体的な手順としては、まず、親子間の情緒面を測定する指標として親子関係の良否について尋ねた質問項目を用いた。これを調査対象の2地域で比較し、さらに対象者の生活構造要因—居住経歴、家族経歴、経済経歴からも分析を試みた。

〔結果〕①松本と府中では、親子関係の主観的評価に差異があり、府中の方が良好である。②ベビーブーマー世代には、あととり規範が明確に残存しているが、あととりの意味や内容が松本と府中では異なっている。③同別居は家族位座と密接な関係を持ち、同居とあととりは複合する部分大きい、松本と府中では同居の意味も異なっている。④親に経済力があれば、親子関係は良好に評価される。⑤松本では家族位座や家族経歴によって、親子関係の評価はかなり明確に二分される。「財継承としての親子関係」や「親扶養を伴う子役割」を担う者と親との関係は良好ではない。⑥府中では親子関係は多層的であり、「財継承としての親子関係」や「親扶養を伴う子役割」からの解放があり、これらは親子の関係の評価を良好な者としている。その背景には親の経済力と大都市圏における激しい人口移動の実態があると考えられる。